「史学論叢」創刊の辞

戦後日本各地において、地方史と題して、庶民資料の研究調査が盛んになった。そして従来あまりにも問題にされない数多くの史料が次々に明らかにされて、地方史研究の重要性が強調されるようになった。しかし近年いわゆる地方史学者のなかに、数千年にわたる人類文化の拠って来るべき源流には目もくれず、企図するところすら忘れて、従事する小事実の範囲から脱出することができなくなったもののあることは、歴史学の進歩にとって遺憾なことである。かつて乾燥したアジア大陸において人類文化の源泉を求めるべきであると主唱したヨーロッパの学者は、一西欧の小地域における研究では、資料の客観的見方が不備であるという点で、広く文化の源泉を観察しようとする考え方から出発したのである。地方史は世界史学の縮図であると考えることは間違であって、世界史的客観史事追求こそ地方史発展の道である。しかして世界史的視野こそ歴史学者のとるべき重要な態度といわなければならない。ここに視野を広く世界の史事に向け、そこから解釈を加えていこうとすることこそ、今後の歴史学の方向でなくてはならぬ。「史家の三鳥」という言葉があるが、これは謙虚に真理を求め意義づける方法を、多くの関係資料を重ねて追求する道であると解釈する。

別府大学文学部に史学科が設立せられたのは昭和三十八年四月で、その設立の意義は地方史研究の発達に寄与することはもちろんであるが、そのような状態から脱出して謙虚に世界史的史実を究め、そこから人類文化に必要な要素を正しく指適しようとすることにある。今日大分県の一地方史ではなく、大分県に在住する歴史学者の

精鋭が中心となって、眼を世界史の広い範囲に見開き、歴史学、考古学、民俗学などの立場から科学的真実の追求をめざして、研究誌「史学論叢」を刊行することになった。しかし厳しい学業のなかで、生まれたばかりの研究機関が、いかにもがいても意図する目的の達成は至難の技というべきであろう。かかる意味から「史学論叢」は広く同じ目的の学者の起稿を欲迎し、充実した研究誌を維持していくことにした。幸い広い分野からの声援と期待が寄せられ、われわれは勇気をもって研究誌の刊行をおこなうことができた。「史学論叢」の創刊にあたって深く感謝の意を表して序にかえる次第である。

昭和三十九年十二月十五日

賀　川　光　夫